

(3) 八方尾根 風雪のビバーク

(1968年2月、唐松岳)

賢明なる諸兄姉はこのタイトルをご覧になって、ハテどこかで見たような・・・？と思われたことと思う。左様、昭和24年1月、風雪が続く槍ヶ岳北鎌尾根の風雪で破壊された雪洞の中で、岳友を看取りながら自分も若干28歳で逝った松濤明の遺書『風雪のビバーク』(朋文堂刊)の手記のタイトルである。

この松濤明の山行とは比べるべくもないが、北アルプス唐松岳への途中、八方尾根でホワイトアウトに掴まって一晩八方尾根上部でツェルトに潜って過ごした時のことを記しておきたい。既に半世紀も前のことであつた。

この山行は、もともとは厳冬期の鹿島鏈ヶ岳・東尾根を目論んだものであつたが、相棒のパンチョ君が新婚の奥さんの猛反対に遭って軟弱化、山のランクを2ランクほど落とし、また日程も半分に短縮して、同じ後立山でも八方尾根から唐松岳に変更したものであつた。八方尾根はなだらかな尾根であるし、以前にも積雪期に登ったこともあつたので、こちらなら片目のケンケン、雪稜のルンルン漫步と踏んだが、そうは問屋が卸さなかつた。

八方尾根は下部が有名なスキーコースにもなっており、また八方山荘(当時)までケーブルで登れるので、ちょっと雪中のお散歩程度と錯覚しやすいが、一旦荒れだすと風雪が荒れ狂い、だだっ広い尾根であるからホワイトアウトになってロスト・ポジション、平川入や南股入に迷い込んで遭難ということがしばしば発生している。約40年前の年末、逗子開成高校山岳部パーティー6名が全員遭難死した例は八方ケルンにも刻まれていて名高い。

さて。

新宿からの夜行列車「急行アルプス」で早朝細野着。ケーブルで黒菱平まで上がる。快晴。第3ケルンまでは陽光の中をルンルン気分で登る。この辺りからトレースが消え、ワカンを履いてラッセル、帰路の目印の為に要所要所に赤旗のワンドを設置しながら下ノ樺、上ノ樺を過ぎて13:30奥丸山下着。この頃から風が強くなり、吹雪模様となってきた。唐松岳の稜線も完全に見えなくなり、ホワイト・アウト。後500mほど登れば唐松小屋があり冬期避難小屋の戸が開いているかもしれないが、このホワイトアウトの中で八方尾根最上部から平川入か南股入に迷い込むと一気に絶壁を5百mほど滑落して彼岸に渡ることになる。マ、唐松岳頂上ももう近いことでもあるし、明日天候が回復してから登ればよいと、今日はこの辺りでビバークすることにした。この奥丸山付近は雪崩の危険があるように見えたので、200mほど降った丸山上部の比較的平坦な尾根筋から5mほど平川入側に入った斜面の疎林の中2410m地点にツェルトを張った。時に15時。

風雪は徐々にその激しさを増し、夕方暗くなる頃には風速20m/sくらいとなった。ツェルトがバタバタ煽られ、また突風が吹く度に裾から吹雪が舞い込んでくる。風向NW、外気温-15度。暖を採るためにツェルトの中でPHOEBUSを焚くが、この炎がツェルトに燃え移らないように手でツェルトの壁や天井を押さえておかねばならないので、手が草臥れてしまう。時間の経過が全く遅い。

19時頃に一時風が弱まって風向も南の風に替わった。ヤレヤレ助かったかと思うも束の間、やがて前にも増して猛烈な吹雪となった。季節風の強い吹き出しであろう。風速は30m/s程度か、瞬間最大風速は45m/sになっているかもしれない。ツェルトがバリバリと吹かれて、ツェルトごと吹き飛ばされそうになる。背中で風を受けるようにツェルトの向きを考えて張っているのだが、少しでも腰を浮かすと風がツェルトの底を押し上げてツェルトごと空に吹き上げられそうになる。PHOEBUSの炎も風で吹き消されて、ツェルトのなかも冷凍庫になってきた。二人で肩を寄せ合ってしっかりとツェルトの壁を押さえつけておかねばならない。

万が一ツェルトが吹き破られた時の為に、オーバーズボン、ヤッケ、その他着れる物は総て着て、またザックも背負って万が一に備える。万が一吹き飛ばされれば平川入へ流されるであろうけれど、もし

そうなった場合でも決して自分が居る所を動かず朝を待つように二人で確認する。また、ウトウトしても常にどちらかが起きているように時間を決めて不寝番の当番とする。ツェルトの裾から舞い込む雪のために衣服もバリバリに凍りだした。寒くてガタガタ震えが止まらないが、震えるということは未だ重篤な低体温症には至っていないのだと自分で自分に言い聞かせる。

何とか朝までツェルトがこの強風に持ちこたえて欲しい。いくら吹雪のホワイトアウトであっても明るくなれば、登りに設置しておいたワンドを頼りに何とか八方尾根を黒菱平まで下山できるであろう。冬山の朝のあの乳白色のホワイトアウトは嫌なものだが、それでも今は乳白色でも何でもよいから朝の薄明が無性に待たれるのである。

全く時間が経たない。もう 30 分経ったかと時計を見れば、何と未だ 1, 2 分しか経過していない。時間が経っていないことにガッカリするので、出来るだけ時計を見ないようにする。ツェルトに潜りこんだのが 16 時、それからやっと 8 時間経って夜中の零時になった。随分長かったが、明るくなるまでには未だ 6 時間も辛抱しなければならない。30 分に 1 回時計を見るとして、後何回見れば朝が来るのか…。

深夜、外で人語が聞こえたような気がした。低体温症による幻聴かもしれない。背筋が水を浴びたようにゾーッとしてきた。一刻も早く朝が来てくれ。ただそればかりを念ずるばかりである。小便したい。しかし、外に出ると吹き飛ばされてそれはそのまま死を意味するからツェルト内に垂れ流したが、ツェルトの底に溜まった小便はみるみる凍っていった。

6 時、ついに乳白色の朝が来た。助かった。背中合わせでもたれてウトウトしている相棒を揺り起こす。ツェルトを撤収しようとして驚く。ツェルトの稜の縫い目がズタズタに破れて昨夜の風の烈しさを物語っていた。こんな姿になりながら一晩中よく堪えてくれたものだ。そのツェルトは今でも押し入れの中に大切に保存している。

上から 2 人パーティーが空身で降りてきた。顔が真っ黒に煤けている。昨夜奥丸山で幕営中コンロの炎が燃え移って天幕を焼き、ザックも流されてツェルト 1 枚でビバークしたのだという。一緒に下ることにした。依然としてホワイトアウトで視界は利かず、昨日設置しておいた赤旗だけが頼りであった。1 時間ほどで黒菱平に下山、山荘で暖かい物を腹に入れてやっと人心地がついた。

今回の失敗は、天気悪化を事前に予想し得なかったことが敗因である。いずれにしても、よく助かったものと思う。



(八方尾根・丸山付近から 中央奥：鹿島鏈ヶ岳、右：五龍岳)

(本稿 完)